

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
分担研究報告書

生殖機能を温存できなかった・しなかった患者の心理支援のあり方に関する研究

山谷 佳子 聖マリアンナ医科大学産婦人科学 臨床心理士
鈴木 直 聖マリアンナ医科大学産婦人科学 教授

研究要旨

妊孕性温存の不欲求／不可能の患者に対する効果的な心理支援のあり方は世界的にまだ実施されていない。そこで、第一研究では、がん治療時に妊孕性温存という選択肢を選べなかった、または自らの意思で選択しなかったがん経験者に、がん治療後の妊孕性やセクシャリティに関するインタビュー(半構造化面接)を実施する。主観的体験の語りを質的帰納的に分析することで、ライフステージにおける長期的な妊孕性にまつわる心理的プロセスを明らかにすることを目的とする。さらに、第一研究の結果から、若年がん患者へのアンケート(第二研究)項目を作成し、がん治療時に妊孕性温存を選択できなかった、または選択しなかった若年がん患者は、どのような心理的支援を必要としているのか検討を行う。

以上により、生殖機能温存ができなかった患者の多様な背景や心理状態を把握し、喪失と共に歩む心理支援のあり方を提言する。

研究協力者：

亀口 憲治(国際医療福祉大学大学院 臨床心理学専攻 教授)

小林 千夏(成田赤十字病院 がん相談員)

A. 研究目的

第一研究では、インタビュー(半構造化面接)による実態把握、探索的研究を行う。がん治療によって妊孕性を喪失、または低下した状態が生じた様々な背景のがん経験者を対象にインタビューを実施し、がん治療後のリプロダクティブ・ヘルスに関する体験を主観的に語ってもらうことで、ライフステージ上の妊孕性にまつわる長期的な心理的プロセスを明らかにすることを目的とする。治療時の妊孕性の喪失の経緯から、現在までの精神的苦痛や心理社会面への影響などの語りを質的帰納的に分析することで、がん治療後の妊孕性やセクシャリティ、人間関係における困りごとを抽出し、妊孕性や家族支援における様々な背景を浮

かび上がらせ、その複雑性を明らかにし、仮説を生成する。第一研究の結果をもとに、若年がん患者へのアンケート(第二研究)項目を作成し、がん治療後のリプロダクティブ・ヘルスにおいて、どのような心理的支援が必要とされているのか検討する。

B. 研究方法

第一研究:研究デザインは、探索的研究であり、半構造化面接による質的研究である。

・背景情報収集アンケート

すべての研究参加者に、半構造化面接の前に自記式アンケートに回答してもらい、背景情報の収集、がん治療後の生殖に関する懸念を測定する。

・半構造化面接

臨床心理士(公認心理師)、もしくはがん・生殖医療専門心理士の資格を持つ者による、半構造化面接を実施する。(対面が困難な場合、WEB や電話での聞き取りを可能とする)

目標症例数：30 例程度。本研究は半構造化面接による質的研究のため、サンプルサイズの計算は適さない。質的研究では、理論的飽和に達するまでサンプルを増やす必要があり、その都度目的を達成できたかどうかを見極めながらサンプル数を決めるものである。エスノグラフィーや M-GTA では、約 30 から 50 名程度と言われているが、本研究の対象患者の希少性からも多くの症例を集めることが難しいと思われるため、目標を 30 症例程度とした。

分析方法:M-GTA による質的帰納的分析を行う。質的研究経験のある臨床心理士複数人によりカテゴリーの作成・分類を行い、定期的に質的心理学研究者や家族心理療法家にスーパーバイズを受けながら分析の妥当性・信頼性を担保する。

第二研究:質問紙調査であり、質問紙の内容は、第一研究の結果をもとに作成する。

倫理面への配慮を以下に記す。

説明と同意：研究の説明文書には、本研究の目的、方法及び資金源、研究者等の関連組織との関わり、本研究に参加することにより期待される利益及びに起こりうる危険、答えたくない質問には答えなくてもよい権利といつでも質問できる権利を有すること、さらに同意した場合でも同意撤回し途中放棄できること、参加者の診療に何ら不利益は生じないこと、参加者の人権保護などの必要事項が記載されており、参加者の自由意思による同意を文書で得る。

個人情報保護：全てのデータおよび同意書は、被験者の秘密保護に十分配慮する。個人情報を取り除き登録番号を付与して連結可能な形式で管理する。試験で得られた試料は厳重に保管し、試料は試験目的以外で使用せず、試験終了後に破棄す

る。試験の結果を公表する際は、被験者を特定できる情報を含めないように厳重に注意する。また、試験の目的以外に試験で得られた被験者のデータを使用しない。

有害事象発生時の取り扱い：本研究内容特性から、研究期間中に研究対象者が生命危機状況に曝される可能性は極めて低いが、可能性としてインタビューによる心理的な侵襲があげられる。質問項目によって、ネガティブな経験の想起、否定的な気づきや葛藤が表面化する可能性があり、こうした心理的反応はインタビュー開始時から終了後も含めて見られる場合がある。本インタビューにおいて深刻な精神症状がみられた場合、医学倫理的な介入や連携などが必要である。そのような場合、早期に周囲との綿密な連携や受診の勧めにより、最小限の反応にとどめ、それ以上の医療、心理、社会的利益を得られるように努める。万が一、予期せぬ反応が起こった場合は、医療機関、相談機関、関係施設などとの緊密な連携をとり、状態の改善を第一目標とする。

C. 研究結果

令和 2 年 9 月 19 日に第 1 回班会議(ZOOM によるリモート会議)を行った。本厚労科研研究班の概要説明と方向性の決定、対象者の設定、インタビュー方法、質問項目の立案を行い、各協力者の立場から貴重なご意見をいただいた。

現段階では、第一研究の内容固め中であり、インタビューは実施されていない。インタビュー参加者を募る患者団体として、若年がん患者団体 STAND UP!! に協力の内諾を得ている。令和 3 年度では、インタビューを実施し、並行してインタビュー内容の質的分析を進める予定である。

D. 考察

センシティブな内容のインタビュー調査となるため、対象者の範囲やインタビュー内容の検討を重ねているところである。また、研究協力者の示

峻から、家族支援や重要他者との関係性の視点を取り入れ、研究内容のブラッシュアップを図る。

本研究では、がん治療後のリプロダクティブ・ヘルスに関する体験の語りから、ライフステージ上の妊孕性にまつわる長期的な心理的プロセスを明らかにし、妊孕性温存の不欲求／不可能の患者に対する効果的な心理支援のあり方の検討につながると思われる。

E. 結論

現段階ではまだ実施されていない。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

2021年2月28日－3月6日 第18回日本生殖心理学会・学術集会

「がん・生殖医療外来における告知：妊孕性温存を試みたが、正常受精胚が少ないことに衝撃を受け、心理支援を要した女性に対する関わり」

山谷佳子、洞下由紀、岩端秀之、鈴木由妃、杉下陽堂、高江正道、鈴木直(聖マリアンナ医科大学産婦人科学)

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし